イスラーム世界における移動と人・物・文化

― 現代イスラームの聖者廟参詣を事例に―

平成 19 年度入学
派遣国：エジプト、シリア
安田 慎

キーワード：イスラーム、聖者廟、参詣、ラマダーン

対象とする問題の概要

イスラームでは、マッカへの巡礼（ハッジ）は啓典クルアーンの中で可能な者が行うべき義務として定められている。交通網が発展した現在では、巡礼の時期になると世界各地から 250 万人近くの巡礼者がマッカに集い、宗教的情熱も最高潮に達する。

マッカへの巡礼以外にも、イスラームでは各地にある聖者の廟（以下聖者廟と表記）へと詣でる参詣（ズィヤーラ）もある。こちらもマッカへの巡礼と同じく、現在では非常に多くの人々が参加する現象へと発展している。

人々は各地から聖者廟に集い、祈り、歌い、踊って多くの参詣者と共に宗教的昂揚を体感している。

研究目的

本研究は、現代多くの人々が参加するイスラームの参詣現象の実態と、生活の中での位置付けを把握する事にある。過去よりイスラームでは各地で盛んに参詣が行われていた。しかし近年では特に、情報技術や交通網が発展した事で国境を超えてより多くの人々が参詣へと出かける、という現象を目にする事ができる。こうした現代的な参詣現象が、人々の生活の中でいかに息づいているのかを明らかにする事が本研究の目標である。

写真 1：シリア最大の聖者廟、サイイダ・ザイナブ廟

写真 2：廟で歌う人々（エジプト、フサイン廟）

フィールドから得られた知見について

今回のフィールド調査では、参詣が盛んに行われていると言われるエジプトとシリアを対象とした。エジプトはタリーカ（イスラーム神秘主義教団）による参詣やマウリド（聖誕祭）が非常に盛んな地域である。一方シリアは過去の史料から多くの聖者廟を目にする

事のできる地域である。両地域にある聖者廟を実際に訪れ、そこで参詣者の行動を観察する事で、参詣の実態を把握する事を目的とした。期間は 9 月初頭から 10 月中旬の約 1 ヶ月半。そのほとんどの期間がラマダーン月（断食月）と重なっていた。

フィールド調査から得られた知見は以下の 4 点である。

第 1 に、過去の史料では確認できた聖者廟の多くが現在では寂れるか、消滅してしまっていた点である。この点には非常に驚かされると同時に、史料では見られない現状をまざまざと見せつけられ、印象に残る部分であった。しかしながら、逆に史料上には存在しなかった聖者廟に多くの人々が集まるという現象にも立ち会い、聖者廟にも人々の間の流行り廃りが存在する点が明らかになった。

第 2 に、エジプトでもシリアでも、国境を超えてくる参詣者が多い点である。特にシリアではレバノンやイラク、イランといった周辺諸国から、果ては湾岸諸国や南アジアからわざわざやってくる参詣者も数多くいた。現代の交通網の発展の恩恵が、このような形で反映されていたところが非常に印象深い点であった。

第 3 に、個人や家族単位の参詣の他にも、専属のガイドが付き、移動は大型バスで行い、宿泊は高級ホテルでというパッケージツアーさながらの参詣が数多く見られた点である。現代の参詣のあり方がこのような形で見えたのが非常に印象的だった。

第 4 に、何よりも印象に残ったのは、参詣が宗教的な目的のみで行われるのではなく、人生の中の楽しみを多分に含んだものである事が明らかになった点である。聖者廟の中では祈ったりする一方、家族や仲間と写真を撮り、暇な時間はショッピングや街の散策、仲間との会話を楽しむ。こうした姿は、日本のお伊勢参りや神社詣でにも繋がる部分があった。

また、フィールドの期間がラマダーンと重なった為、非常に貴重な体験をする事になった。日本から見ると断食とは辛いイメージがつきまとうが、彼らにとってはこの時期はお祭りであり、同時に宗教的昂揚の時期でもある。ラマダーンにさしかかる頃から道ばたではクルアーンを読む人が増え、人々に息づいたイスラームの姿を目の当たりにする事になった。また昼間は生彩に欠ける人々も、断食の終わりを告げる合図と共に一斉にイフタール（断食明けの食事）を取り始める。道ばたを歩いていた自分も幾度となく現地の人々からイフタールに誘われ、食事を共にする機会があった。そうした分け隔てなく様々な人々と食事を囲むその姿に、人々の親切さを実感した。

写真 3：聖者廟の庭でくつろぐ参詣者達

写真 4：ガイドの説明に耳を傾ける参詣者達

今後の展開・問題点

今回のフィールド調査を通じて、自分の調査対象が定まった点が最大の収穫である。同時に、文献資料だけではどうしても把握できない生の実態を、肌身を通じて感じる事ができた点も収穫であった。更に、知見の欄でも述べた通り、自分が予想していた現象とはまったく違った現象が目の前で展開され、それが逆に新鮮であり、興味深い点でもあった。

その一方で反省点として、自分の語学能力と知識不足という問題から、観察に終止してしまいがちで、聞き取り調査がまともに行えなかった点があげられる。更に、知識の面でも不足する部分が多く、目の前で起きている様々な現象がどういった背景でなされているのかを理解できなかったことも悔やまれる。

上記のような問題点がありながらも、実際に自らの目で見ることによって、具体的なイメージと経験を持って自らの研究を進められるようになった点は非常に大きい。多大な支援を行ってくれた「魅力ある大学院教育」プログラムには感謝が尽きない次第である。

写真 5：イフタールの食事（タンターにて）

写真 6：イフタール前の情景（カイロにて）